

放送人の会

No.72

2015.11.20

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 Tel & fax 03-3221-0019 Mail info@hosojin.com
 発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉 編集担当 伊藤 浩 (広報委員長・編集長)、鈴木典之、逸見京子、
 前川英樹 (HP担当)、松尾羊一 事務局 佐藤真美子、須斎恵美子

「越境」ということ

放送人の会 会長 今野勉

■越境する暴力

本稿の締め切り間際に、パリのテロ事件の一報が入った。今年一月に起こった政治週刊誌「シャルリー・エブト」事件の延長線上の事件かとも思われたが、全容が明らかになるにつれて、一週刊誌の次元をはるかに超えたものであることが解ってきた。予定稿を後回しにして、この事件をめぐって考えてみることにした。

襲われたのは、バーヤレストラン、ロッキンロールの演奏会場の劇場、サッカーの試合が行われていた球技場である。それらに共通するのは「反イスラム的」な場所であることだという指摘がある。つまり、今回のテロはアメリカやヨーロッパの「文明」に対して仕掛けられた「イスラム文明」による戦争だという指摘である。

その指摘が正しいとすれば、今回のテロ事件は、2001年にアメリカで起こった同時多発テロ(9・11)の延長線上にある、ということになる。あの時、数百人の乗客を乗せた旅客機が、アメリカ文明のシンボルの様な超高層ビルへ突っ込んでいく様子を衛星放送による生中継で目撃することになった私は、この様な、想像を絶する残虐で悲惨な事件を起こす「憎悪」が、これまでに地球上のどこかで増殖し蓄積されてきてい

たのに、私たちはその様な「情報」を全く知ることがなかった、という驚きに打たれたことを、思い出した。情報が無いところには想像力を働かせようがないのだ。あの事件から15年が経っている。

今回の事件を起こしたのは、イスラミック・ステート(イスラム国、IS)である。ISは、現状の国家の境界を越えてその支配地域を成立させている。今、例えば私たちの周りのアジアの国々の境界を越えて、何らかの「国」が出来るなどということが、想像できるだろうか。アメリカの同時多発テロから15年たつてのISの出現とその「戦争」は、やはり私の想像力の限界の向こう側にある。

■越境する放送

実は、本稿の予定テーマは、「日韓中テレビ制作者フォーラム」の直後でもあるので、放送人の会の会員である二人の韓国名のメディア研究者の日本語による著書を紹介すること、であった。一冊は、北海道大学大学院助教・玄武岩(ヒョン・ムアン)の編著による「越境するメディアと東アジア」。今年3月に刊行された。サブタイトルに「リジョナル放送の構築に向けて」とあるように、東アジアというリジョン(地域)

に、互いに共有する放送空間をどの様に作っていくか、という構想を考察した本である。「東アジア」とは具体的には、日本、韓国、中国であり、「日韓中テレビ制作者フォーラム」については互いに「越境」して「東アジア」という放送空間へ向かい得るか、という視点から論じられている。

現状の政治状況からすれば、この構想は私の想像力の限界ギリギリのところにある。それ故に、玄さんを初めとする共著者の皆さんの構想力に敬意を覚える。予定を変更してパリのテロ事件を取り上げたが、それは、玄さんの「越境して地域放送空間を作る」という想像力に、私が喚起されていたからでもある。

もう一冊は、佛教大学社会学部教授・崔銀姫(チエ・ウンヒ)による「日本のテレビドキュメンタリーの歴史社会学」である。10月31日に刊行されたばかりである。聞き取りをした日本のテレビドキュメンタリー関係者だけでも20名を超えるという労作で、元は2000年に提出された東京大学大学院の修士論文である。その論文に大幅な加筆をして完成した同書は、日本におけるテレビドキュメンタリーがどの様にして生まれたかについての金字塔である。これもまた日韓の境界を越えている。敢えてパリのテロ事件を取り上げたのは、翻って「放送人の会」は何をを目指すのかという思いを新たにするためである。

日韓中フォーラム釜山大会日程

会場 釜山・海雲台グランドホテル

10月28日(水)

- 15時 各国参加者チェックイン
- 16時～17時 日韓中組織委員会
→グランドホテル2階
- 18時～19時 開会式及び公演
- 19時 歓迎晩餐会
→グランドボールルーム

10月29日(木)

- 9時～10時半 鑑賞及び討論・中国芸能
「音楽の巨匠の授業」 姚小琴、郭暢
- 10時半～12時 鑑賞及び討論・日本芸能
「しくじり先生」俺みたいになるな!
- 富沢有人
- 12時10分 代表団団体写真撮影
- 12時半～13時半 昼食
- 13時半～15時 フォーラム「国際共同制作の現状」 司会・イ・ドンギョ パネリスト・キム・ヒョンジュ、焦波、田村文孝
- 15時～16時半 鑑賞及び討論・韓国芸能
「青春FCハングリイレブン」 崔在亨
- 16時半～18時 鑑賞及び討論・中国ドラマ
「武神趙子龍」 程力棟
- セッションの司会・ソン・イルジュン、イ・ドンギョ
- 18時 夕食(参鶏湯)及び釜山市観光
(広安大橋、広安里など)

10月30日(金)

- 9時～10時半 鑑賞及び討論・日本ドラマ
「おやじの背中」ウエディング・マッチ
八木康夫
- 10時半～12時 鑑賞及び討論・韓国ドラマ
ユ「町の晩餐」 チャン・ソンジュ、イ・ジウン、ユ・キョンヒョン、ナム・ジンヒョン
- 12時～13時半 昼食
- 13時半～15時 鑑賞及び討論・中国ドラマ
ユ「田舎から見た中国」 焦波
- 15時～16時半 鑑賞及び討論・日本ドラマ
ユ「NHKスペシャル・見えず聞こえずとも」 伊集院要
- 16時半～18時 鑑賞及び討論・韓国ドラマ
マ「ヨンパリ」 オ・ジンソク
- セッションの司会・ソン・イルジュン、イ・ドンギョ
- 18時 夕食

10月31日(土)

- 9時～10時 閉会式 海雲台グランドホテル・レジヤロービー2階コンベンションホール
- 10時 釜山市内観光(新世界デパートなど)及び昼食

付帯行事

- KPDAピッチング
- 10月29日(木) 海雲台ホテル1階グランドスターホールで、7チーム参加。日本からは牧之瀬恵子氏が「ブロンレポート」を。

参加者の感想・意見

商業性とフォーラムの歴史

飯田みか

最終日、閉会式後に案内されたのは、世界最大のデパート「新世界」でした。隣にある「映画の殿堂」(国際映画祭会場)は、目を見張る前衛芸術的な巨大建築物です。二つの「先進性・商業性」は、釜山という都市を象徴し、そして今年のフォーラムの雰囲気ともリンクしていました。

過去2回参加したフォーラム(慶州、横浜)では、歴史的・政治的事情を背景にした非常にデリケートなやりとりや、小さな表現が引き起こした感情的なトラブルを目にしました。今回はそのようなことがなく、感じたのはビジネスへの前向きな期待です。

番組を評するのに、特に韓国・中国の参加者から「フォーマットとして通用する」という言葉が多く聞かれました。もちろん、今回のテーマに沿った自然な表現です。私自身も作品を見ながら、「これは、日本だったら……」と楽しく想像を膨らませていました。

次回からは、ますますこの傾向が進むのでしょうか。それでも、番組制作者が個人として交流し、理解を深めていくという基本姿勢は、ぜひ保っていたいただきたいと願わずにはいられません。トラブルも含めた15年の歴史は、このフォーラムにとって、また日本の放送業界にとって、語り継ぐべき財産になっていくと思っております。GALAC 11月号の巻頭グラビアで、今野勉氏がフォーラムの意義を語っておられます。ぜひ一読を。

有意義で楽しい四日間に感謝しつつ。

今回の大会は15回目だが、わたくしはこのうち8回参加した。この間日韓中の政治的関係は、たびたびぎくしゃくし、二国の経済は次々に高度成長のピークが過ぎた。しかしこの間にもグローバルイズムが進展した。このような大きな歴史の流れの影響を受けつつも、三国のテレビ制作者の交流は続いてきた。

今回の大会のテーマは、テレビ番組のグローバルな交流を強く意識したもので上映された番組の中には各国参加者の多くが感動したものもあった。

一方大会では、「ドキュメンタリーは人生、民族にかかわり、共同制作は難しい」という発言もあった。反対にエンターテインメントについては「民族的なものが最もグローバル」とも言われた。また「三国の若者は関心事を共有しているので日韓中三国でメインタイトルを決めて各国ごとにシリーズを作ったらよい」という提案もあった。

次の大会のテーマを早く決めて、緩い共通テーマで各国が制作したものを持ち寄ると議論が深まるかもしれないと思った。

グローバルの再認識

隈部紀生

「グローバル」という言葉がある。「グローバル」と「ローカル」を組み合わせてソニーの社長だった故盛田昭夫氏が作った造語と聞いた。放送については「ローカルの多様性を生かし、グローバルに通用するテレビ番組を作る」ということだろうか。「グローバル」の再認識をした大会だった。

メディアの役割

小池 勝次郎

3年ぶりに韓国を訪ねた。第15回日韓中テレビ制作者フォーラムが開かれる釜山の高層ホテルから眺める日本につながる紺碧の海が静かで美しい。しかしここ数年、日韓関係は歴史問題で厳しさを深め冷え込んでいる。従軍慰安婦問題の「解決」を迫る朴大統領の強硬姿勢や竹島問題、産経新聞加藤前支局長裁判等が日本人の嫌韓感情に火をつけていると言われている。

日本と韓国の人的交流は、2012年が550万人と好調だったが、2014年には504万人と激減している。成田空港で買った雑誌（週刊ダイヤモンド）には「ビジネスマン6000人に聞いた！日韓大問題」が特集されていた。両国のビジネススマンを対象とした意識調査である。「嫌いな国・地域は何処ですか？」との質問に、日本側の回答は、①中国（88.6%）、②韓国（79.2%）とあり、韓国側の回答は、①日本（54.2%）、②中国（33.7%）。

このデータを見る限り、日本側の嫌中・嫌韓意識は高い。そして、その両国関係悪化の要因に、相手国の偏向報道があると指摘し、メディアの大衆迎合傾向が反日・反韓意識を増幅していると警告する。グローバル化された時代の政治・経済上の出来事や発言は、テレビ映像やネットを通じて瞬時に世界中に拡散し、人々の気持ちに浸透し沈殿して行く。

ホテル内の会場では、日韓中のテレビ制作者達が各国の作品を視聴し制作者の熱い思いに聞き入り、互いの意見を述べ合う。

この場では、嫌韓・嫌中感情は見えない。テレビ制作に取り組んできた者同志が抱える共通の関心と問題点について、同じ十俵で真摯な議論が行われた。

日韓中テレビ制作者フォーラムも15回目を迎えた。メディアの影響力が問われる今、このフォーラムの役割と、今後の広がりを見守る必要があるかもしれない。

帰国後、3年半ぶりに開催された日韓首脳会談をテレビで見た。安倍首相と朴大統領の首脳会談が一度もなかったという異常な状態は解消された。現地ソウル特派員が語った「首脳会談は終了したが、慰安婦問題をどのように解決するか見通しは立っていない。今後日韓の関係修復には、時間がかかりそうだ」とのコメントが耳に残った。

二つの番組

河野尚行

韓国の番組で、印象に残ったのが、韓国KBSの「町の晩餐」である。与野党の責任ある幹部が原発建設で揺れる港町に乗り込み、反対・賛成の両者と膝突き合わせて意見を交わすという趣向。港の市場の近くにテント張りのにわか居酒屋を仕立て、陽が落ちたころから酒を酌み交わし、地元のが海産物をつまみながら議論を展開する。そこに、江原道三陟での原発誘致運動の背景が見えてくる。

日本よりはるかに原発に電気エネルギーを依存する韓国、反対が大多数なのに前市長が原発誘致に走り、一度原発建設が決定される。福島原発事故が反対運動を強力に押し上げることになり、反対派は人口減少の僻地の振興策に乗っても、いったん事故が起きれば未代までもその影響は響くと主張する。テントの居酒屋の周辺には反対派の住民が取り巻き、誘致賛成派の代表の発言に激しくヤジを飛ばす。この会合に加わった国のエネルギー担当の役人も、与野の政策責任者も自らの意見を開陳するが相手の言い分もよく聞く努力をする。

「このように住民の意見にじっくり耳を傾け、それを議会に、国の政治に反映させる。それが民主主義の基本」と二人の政界リーダーは、テレビ画面に向かって再三、言わざるを得なくなる。飲食代は、演出上議員のポケットマネーで支払ったことにな

っている。

問題が起きている現場の中に大物政治家を投げ込み、当事者同士が話し合う。このような臨場感あふれる政治討論番組を日本のテレビでお目にかかったことはない。

中国の番組では、焦波監督の「田舎から見た中国」。書と音楽にのめり込み、頼りなさそうな亭主と、口達者な女房の農家を中心に、山東省の村の一年が淡々と描かれる。正月の行事や集落の葬儀、近所のいさかいも描かれる。大学生の息子は田舎には帰らないだろう。村をまとめる共産党員も、隣のおじさんの風貌だ。スタッフが村に住み着いて回したVTRは1000時間。この50分強の番組から外され、落とされたカットに興味がある。変貌し始めた中国の農村は、あと10年、30年のうちに大変化が起きるだろう。村人の日常を淡々と記録した1000時間の映像のすべてが、未来への遺産・貴重なアーカイブスである。

ハプチョンに祈る

菅野高至

閉会式の後、ホテルの玄関前で、仏教大学の崔銀姫さんにタクシーの運転手さんと交渉して貰う。料金は幾らかかっても構わないから、慶尚南道・陝川（ハプチョン）の「慰霊園」でお参りを済まして、15時までに飛行場に戻って欲しい、と。

10時半、釜山から北へ、淡い紅葉の山並を走る。途中、事故渋滞に巻き込まれ、時

間をロスして、2時間半ほどかかって、やっと到着する。

植民地支配の時代、陝川出身者が多数広島へ渡る。1945年8月、広島と長崎で朝鮮人7万人が被爆し、4万人余りが命を失う。光復後、韓国人被爆者の多くが陝川に戻り、二、三世が生まれる。陝川は「韓国の広島」と呼ばれるようになる。

20年前、『戦後50年企画』として、在韓被爆者取材して、広島、ソウル、ハプチヨン等を舞台に、「されど、わが愛」(1995年8月5日夜9時)、脚本：山田信夫出演：萩原健一、山形勲 というドラマを作る。当時、陝川には、木造2階建ての小さな建物の中に、原爆被害者の集会所と資料室があつて、そこでロケをする。

放送の翌年、陝川の郊外、山裾に「原爆被害者福祉会館」が建てられ、大韓赤十字社の運営で、高齢の被爆者が療養しつつ余生を送る施設が出来る。資料室と集会所もそこに移転する。建築費と運営費は日韓両政府から合わせて40億円が拠出される。定員は百十人で、今も入院を希望する待機者が百人を超えると言ふ。

会館の裏庭に、「慰霊園」というお堂が建っている。お参りをしたいからと、鍵のかかった扉を開けて貰う。亡くなった被爆者1000人以上の位牌が整然と並ぶ。その数の多さと、一つ一つの存在感に、思わず土間に正座する。

1997年、宗教団体「太陽会」の理事長を務めていた高橋公純氏が、日本人とし

て懺悔の心を表したいと、自費で建立したものである。亡くなった被爆者の名を位牌に書いて、供養するお堂である。高橋氏はその後、帰化して韓国籍を取得、位牌を書き続けている。

鍵を開けてくれた職員が、火のついた蠟燭と線香を持って来てくれる。何も持たずに、手ぶらで来てしまったのが何とも恥ずかしい。線香に火を付けて祈る。吹き来る風が心地よい。亡くなった脚本家の山田信夫さんと、俳優の山形勲さんを思いつつ、ハプチヨン再訪を誓う。

帰り道、人の良い運転手氏は飯抜き休憩抜きだと、手振りして伝えて、ひたすら飛ばして走る。飛行場に、無事3時過ぎに着いた時、運転手氏は少し誇らしげだった。

「バンドラの箱」の重さ

鈴木嘉一

戦後70年を迎え、NHK・民放各局で多くの関連番組が放送されたこの夏、安倍首相が発表した「安倍談話」は国内外で論議を呼んだ。特に、関係が冷え切っている韓国や中国からは従軍慰安婦問題などの「歴史認識」をめぐる、予想通りの反発が起きた。

10月に入って、国連教育・科学・文化機関(ユネスコ)が世界記憶遺産に登録した2件が、新たな火種となった。日本が申請した「舞鶴への生還」、つまりソ連によるシベリア抑留からの引き揚げと、中国が申請

した旧日本軍の「南京大虐殺の文書」である。シベリア抑留の登録に対し、ロシア・ユネスコ委員会のオルジョニキエ書記の興味深い談話が、16日付の朝日新聞国際面に小さく載った。「ユネスコは政治的な問題を扱うべきではない」と撤回を求めたうえで、南京大虐殺にも言及し、「こうした登録は『バンドラの箱』を開けることになる」と指摘した。

第15回を数える日韓中テレビ制作者フォーラムは微妙な国際情勢の中、韓国・釜山で10月28日から4日間開催された。この直後には、ソウルでの日中韓首脳会談が控えていた。

日本の参加者の多くは、横浜市で開かれた昨年のフォーラムでの苦い出来事を忘れるわけにはいかなかっただろう。NHK広島放送局のドキュメンタリードラマ「基町アパート」が時代背景として取り上げた旧満州などの表現が、中国と韓国から激しい批判を浴びた。特に、中国勢は「よりによって、『九・一八』の前日に上映するとは」と、この後の記念撮影をボイコットするほど猛反発した。「九・一八」とは満州事変の発端となった柳条湖事件の日で、中国では日本の侵略を招いた「国辱の日」とされている。

今回のテーマは「アジア・フォーラムの可能性」だった。韓国PD連合会が釜山コンテンツマーケット組織委員会などの支援を受けるため、アジアからの国際発信や国際共同制作を想定し、各国の上映作品も

そうした観点から選ばれたようだ。各国に共通する今日的なテーマで、収穫は大きかった。その一方、「戦後70年」という節目に際し、公式スピーチでも上映作品に対する討論でも全く触れられなかったことには、拍子抜けの感すら覚えた。

結果的にせよ、歴史認識問題につながりそうな作品や話題が避けられたのは、各国の参加者たちの「大人の知恵」だろうか。それがかえって、日韓中の国家間だけではなく、文化交流を第一義とする制作者の間にも横たわる「バンドラの箱」の重さを実感させた。

国際共同制作の現状フォーラムに参加して

田村文孝

日本国内でも、「ああ、もうこれは制作中止だな」と思われるような深刻なトラブルは、番組制作の現場で時折発生します。が、そこは何かみんな頑張りつつ完成にこぎ着けるのが通常ですが、国際共同制作の場合には、「最低10個の致命的トラブルが発生する」というのが自分の経験則になっています。というか、あらゆるフェイズで仕事の流儀が異なる海外での現場で、そのように覚悟を決めないと、現場崩壊を回避する気が続かないと言わなければなりません。ある種のおまじないです。

2012年に相次いで発生した「竹島・尖閣問題」によって、それまで日韓中の制

作者たちの間で精力的に積み上げられてきた国際共同制作を含む様々なプロジェクトは一気に停滞してしまいました。国家間のトラブルは、流石に現場の日韓中の制作者たちには如何ともし難く、凍結となった企画は数多く存在します。

3年を経た今、釜山で表題のようなディスカッションが、日韓中の現場の制作者が集まって行われたこと、それ自体がとても大切に貴重なものだと感じます。

「放送番組」とは元来ドメスティックなものでしょう。しかし、日韓中を含むアジア圏に向かって、世界中から膨大なヒトモノカネが集中する昨今、テーマ、ストーリー、登場人物、場所といった主要な要素が「日本」だけで完結しない企画が、今後増えて来てもなんら不思議はありません。

現場のディレクターたちは、必然的にそのような普遍的な企画を投げ、採択され、韓国や中国と連動し、クリエイティブとビジネスの両面でひとつの目標に向かって知恵やノウハウ、パワーを発揮してゆく。そのための最低限の日韓中での共通ルール、スタンダードを構築してゆくこと（これも「フォーマット」と言えます）も、来年以降このフォーラムの重要な使命なのではないかと、ディスカッションを通じて再認識しました。（元NHKプロデューサー）

「しくじり先生」は韓国と中国の制作者にどう受け止められたのか

編者 有名人

馴染みのない発想、見慣れない編集……、今回のテレビ制作者フォーラムで観た韓国や中国のどの作品も日本のそれとは少しばかり違い、正直に言うと違和感を覚えたものが多かった。ただ、そこが今回出席したことの意味であり、こんなに近い国にも拘らず、大きな文化の違いがある、というところを肌で感じる事が一番の目的であったようにも思う。

大会テーマである「アジアフォーマットの可能性」、つまり世界に通用するフォーマットを作り得るかを考えるにあたって、この文化の違いが一番の障壁となるのは当然で、それだけに、今回出展した「しくじり先生」俺みたいになるな」がまずは両国の制作者にどう受け止められたのかは今でも気になっている。

鑑賞とプレゼン後の質疑応答では引つ切り無しに手が上がり、さらに、討論終了後にも自分のところへ来て、追加の質問であったり、教科書を手に取りじっくり見入るなどしている両国の制作者を見ていると、「しくじり先生」のフォーマットに高い関心を持ってもらえたように感じている。しかし、教室という設定、先生と生徒という関係図、教科書という小道具、このような視覚的なフォーマットは受け入れられ

た手応えはあったが、果たして「しくじり」という言葉のニュアンスまで伝えることができたのかは疑問で、ここに文化の壁が大きく存在するように感じる。事実「失敗の定義」や「失敗した先生とは何をもって決めるのか」などの質問が複数あがっていた。

このように、日本語には存在して外国語には無い細かなニュアンスをどう現地の言葉に変換して伝えていくかを考えることが、今後、アジアフォーマットをグローバルコンテンツとして発信し得るか否かに、多大な影響を与えていくのではないかと感じた。異国文化と相互理解について考えさせられた、とても有意義な4日間であった。（テレビ朝日 編成部「しくじり先生」前プロデューサー）

釜山ふしぎ発見！〜映画都市、イケメン、アジア3国〜

長谷川朋子

3つの「釜山ふしぎ発見」がありました。一つ目は今回の舞台、釜山の街そのものの。目に入る街並みはお台場あたりの小洒落た雰囲気、聞けば不動産バブル。何がそうさせたのかと調べると、映画祭で有名になり、映像コンテンツ都市として推進中という。元祖・映画の街のフランス・カンヌと同じようにビーチリゾートを有し、カジノもあります。最終日に思いがけず足を運べた「釜山国際映画祭」の会場、映画の殿堂を目の前にし、斬新なデザインと大き

さに圧倒されながらこの存在感こそ、いまひとつ盛り上がりがない東京国際映画祭の理由に繋がっているのかもと思う場面もありました。

勢いある街にびつたりと二つ目の「ふしぎ発見」は、今流行りの塩系イケメン韓国男子です。街中では想像以上に、今回の韓国ドラマ『ヨンパリ』主演俳優のような面持ちの男性をちらほら見かけました。美男美女に拘るドラマの影響を受け、イケメン率が高かったら上昇しているのかもしれませんが。この密かな発見はちよつとした楽しみでありました。

最後の三つ目は日韓中テレビ制作者フォーラムの「価値」の発見です。現役やOBのプロデューサーの方々が集まり、キャリアや所属、立場を越えて、朝から晩までテレビ番組について純粋に語り合う場はあるようでないのかも。アジアを率いる3国で行い、続ける価値を次回のフォーラムでも見つけていきたいと思えます。詳細は「放送ジャーナル」レポート記事にてまとめます！皆様引き続きどうぞ宜しくお願いいたします。（放送ジャーナル）

フォーラムの主題

藤久ミネ

今回の釜山大会の会場は、白砂の海水浴場を眼下に見下ろす豪華な海雲台グランドホテルだった。視聴と討論が行われたのは2階のグランド・ボールルーム。主題

や制作をめぐる論争よりも、華やかな宴席が似合うきらびやかなホールである。だから……という訳ではなからうが、韓国、中国のドラマはともに売らんかな精神に徹して製作費を投入した娯楽大作であり、それは私のような旧弊な人間から見ればきわめて劇画的であって、ドラマというより見世物茶の間の視聴には不向きであり、個室、いやむしる劇場向きのスペクタクル作品であった。釜山はいま、映画祭を売り物にしていく都市でもあるから、そういう事情もかまむのかもしれない。中国の『武神趙子龍』は『三国志』に材をとって特撮と編集が売り物。1本のコスト2000万人民币だという。韓国の『ヨンパリ』は凄腕の外科医がヤクザともからんで荒唐無稽な外科手術を披露、財閥令嬢と結ばれるアクション・メロで、派手なカー・チェイス場面は日本では警察の許可がとれないとのことだった。今回のテーマ「アジアン・フォーマットの可能性」は、釜山にふさわしくテレビと映画の協同で、マーケット拡大にどう対応するかの実験的な試みであったかもしれない。が、わたくしには歴史的認識をめぐって物議をかもした昨年の横浜大会がなつかしく思い出された。この東アジア3国それぞれの国の行方を、テレビがどのように報道していくのか、そこそがフォーラムの主題ではないのか。

表現とは「客を裏切ること」
そして「何を見せないか」ということ

前川英樹

日本からの参加作品「おやじの背中 ウエディング・マッチ」(TBS)のプレゼンテーションで、八木康夫プロデューサーはこのドラマのエンディングについてこう語った。「結婚式の前日にトレーナーの父とボクサーの娘が戦って父がノックアウトされた次のシーンで、顔を張らせた父娘が腕を組んでバージンを歩くのを見る人は期待するだろう。だけど、作家も私もそうはしたくなかった」と。

そう、ここには制作者と視聴者、作り手と受けての勝負感覚、駆け引きの妙とでもいふべき遊びがある。映画でも例えば「突然炎のごっこ」のような終わり方がある。

ハイビジョンが技術的実験から実験的製作へ移行する過程で、「芸術家の食卓」、「陰影礼賛」などの冒険と遊びを経験したが、その時のVEで自身も映像作家であった安藤紘平君は「表現とは何を見せるかではなく、何を見せないかです」といつていた。なるほどね…。

中国や韓国の作品を見て思うのは「見せ過ぎ」であり、「見せることを強要しすぎ」であり、客を裏切ったり、客と駆け引きしたりということがないということだ。

中国の場合は、テーマも実験的方法も制約があるであろうがゆえに、CGや特撮で

して編集などのテクニカルな部分で創造性を満たそうとしているのである。韓国の場合は、「遊びは無駄」で「そんな暇がない」という性急さが制作環境にあるのであろうか。

さてしかし、報道のみならずエンタテイメントからスポーツに至るテレビジョンのすべてがジャーナリズムであるとして、その時「裏切ったり」「見せなかつたり」という方法で、日本のテレビ制作者は、この時代Vに何をメッセージとして提示するであろうか。

感想

山田良明

数年ぶりに参加したフォーラムは、刺激的でした。特に、映像コンテンツとその流通を国の産業にしていこうというプサン市の積極的取り組みは羨ましい限りでした。

韓国、中国、二人のドラマ制作者のモチベーションの高さに触発されました。

「ヨンパリ」の、才監督の「保守的な価値観を革新的な表現で」の言葉、印象に残りました。

彼らの意識は、放送とか国という縛りを超えて、世界中の人々を魅了していくという夢と確信に満ちていました。

3日目の夕食は日中韓の参加者が一つのテーブルに集い話が弾み何度も乾杯をしました。中国のプロデューサーとはスマホの翻訳機能を使って会話をしました。同行した女性プロデューサーの卵たちに

とっても大変貴重な体験になったようです。有難うございました。(共同テレビ)

私とテレビ制作者フォーラム

村上雅通

私の古巣熊本放送は、韓国の蔚山MBCと交互にイベントを実施している。今年は10月に開催された熊本城お城まつりで、日韓の人気グループによる「友情コンサート」を実施し3000人の観客が来場した。蔚山MBCとは過去2度、テレビ番組の共同制作も実施した。こうした交流のきっかけになったのが、一回目の日韓船上フォーラムだった。フェリーで出会った蔚山MBCの李榮薫プロデューサーとの会話から、交流話を持ち上がった。途中紆余曲折はあったが、かれこれ10年あまり、交流は続いている。

フォーラムでは数多くの出会いがあり交流がうまれた。中国の王占海さんには、私の後輩の中国取材ビザを取っていただき、韓国の宋日準さんには私が勤務する大学で講義をお願いした。一方では、取材で熊本にやってきた重慶テレビのクルーの案内役を買って出たこともある。こうした関係は、発足以来フォーラムに関わらせていただいた私の「財産」になっている。今回のフォーラムでも、かつての韓国プロデューサー連合会の会長で現在KBS釜山の梁承東ディレクターが、連絡が途絶えていた私の25年来の知人の電話番号を突き止めてくださ

った。

フォーラムを通じた個人的関係の構築は年々広がり深まっている。しかしフォーラム本体への関わりは薄まってしまった。そのことを実感したのは、昨年の「基町アパート事件」だ。何かを発言しなければならぬこと、行動を起こさなければならぬことは重々承知しているのだが、この1年、何かをすることはなかった。今回のフォーラムでも、昨年の「事件」などなかったかのように淡々と進行するイベントに違和感を抱きながらも、中韓の参加者に問いかけるエネルギーは湧いてこなかった。

長崎に戻り休講した3科目の授業で、学生たちにフォーラムの報告したのだが、表面的な話題に終始した。なんとも情けない。フォーラムに参加する目的は？意義は？今、改めて自らに問いかけている。

喧嘩でなく共感の渦

横山 英治

15年前放送人の会に入れてもらったものすぐドキュメントの現場離れ、気後れから失礼続けてまいりました。去年医療番組担当に復帰、戦後70年節目の日中韓の放送人の会とあれば話を聞きたく、ぜひにと参加させていただきました。テーマのアジア「フォーラム」はゼニの話かと、いささか面食らいましたが、今野さんの話を聞くうちIT用語に「初期化」という意味があったことが思い出され、なかなか深い

意味があるのではと探しました。

膨大な制作費とハイテク駆使しハリウッドに迫る中国大河トレンドドラマに驚き異なる立場の政治家を原簿建設問題の現場につれて行き、住民怒号の中で収録する韓国政治番組のぶち抜け方に痺れました。「現場にゆかない」日本のジャーナリズム、大いに反省すべきかと。しかしバラエティの中に「失敗の本質」を「教科書」を手間かけて刻んで造る制作番組の丁寧さ、ヒューマンドキュメントの中でドラマに迫る障がい者の「ラプストーリー」の暖かさ、日本のテレビの熟成にも気づきます。また父娘ボクサーを描いたドラマの演出こそ、放送人の会に誘ってくれたわが先輩鶴橋康夫であったことに驚きました。

一衣帯水の隣国ながら、歴史の重みの相互理解はすぐ遠のき、政治経済軍事の荒波があれば、ネット経由でヘイトスピーチの津波が放送にまで押し寄せる。しかし韓国は経済ピンチの中にも文化ビジネスの都として映像の釜山を、さらに出版都市はバジューを確立させています。リーダーたちの懐と知恵の深さ、スケールの大きさに驚きます。また中国のハリウッド「永楽」とはいかなる場でしょうか。

残念ながら3日目の朝、アジアの海に臨む海雲台の浜辺を8キロジョギングしてのち、翌日からの東北取材のため釜山を離れました。そして気仙沼の浜辺では、被災地医療の再建に取り組んだ元ロボクサーのぶち抜けたドクターと一緒に走りまわりました。

大会では韓国通の先輩から38度線までのマラソン大会の企画も教えられました。これからできることアジアフォーラムとは、多様な共生の可能性に至るマラソンロードのことなのかもしれない。もつと喧嘩になるかと思いきやの共感の渦。そこに皆の海ありーこれぞマラソンにも似た国際大会の感動かとー韓国放送人はじめ関係者の皆様に感謝です！

しくじりのフォーラム

吉田賢策

酒。酒がだんだん廻ってくる。マッコリは危ない。飲みやすいゆえに、昔しくじりの経験がある。でも話は面白過ぎるのだ。

釜山最後の夜のレストランでの場、話の相手は韓国側のプロデューサーで企画話が盛り上がりつつあった。実にスケールの大きな日中韓共同制作話でファンタジック、これならば政治的な障壁もなからう。夢がひろがるうちにいつしか自分の右手は勝手にマッコリの栓をどんどんあけていた。…そして時が過ぎてゆく。ホテルに戻り一息入れた時私のカバンがないのに気が付いた。まあ人生もつと大きなしくじりをやってこまできたのだから。

今回「しくじり先生」を皮切りにフォーラムビジネスの話は様々に展開した。独創性を持つ組み立てによつては錬金術のように金を生む。そのためには成功と失敗の歴史があつたのだろうか、制作費に苦しむ

放送界の人にとって魅力あることに違いない。企画のポイントである「教科書」を見るに來る人がなんと多かったことであろう。また「放送人の会」に入つてまだ日が浅い私にとつて、会員や各界の人と交遊ができたことは有意義なことであつた。旅はいいものである。

再びその夜の話、カバン騒動の結着がついて海岸で冷たい風にあつた。期間中照らしてくれた大きな丸い月に感謝しながら政治状況も好転の兆しがでているかも、と思ひ冷静さを取り戻す。ふとポケットを探る。

あつー鍵がない！

日韓中テレビ制作者フォーラム釜山大会を終えて

渡辺 純史

会場のポスターやパンフレットの表紙の主催者欄に、これまでの3団体（日本放送人の会、韓国ー韓国PD連合、中国ー中国電視芸術家協会）に、BCM（フサン・コンテンツ・マーケット）がさりげなく加わっている。大会のテーマは「アジアフォーラム」。フォーラムに並行して、共同制作のためのピッチングが行われている。サンの会場で、私は初めて参加した福岡大会を思い出していた。7年前の第8回大会である。

テーマは「若者たちは今」、中国は北京オリンピックを成功させ、一人あたりのGN

Pで日本を追い越し、世界2位に躍り出そうとする時期であり、韓国の「韓流ドラマ」がまさにアジアを席巻している時期であった。若者の今を描く3国のドラマは、共通して、現代のコミュニケーションツールとなった「ケータイ」で繋がる男女関係を描いた。しかし、その内容はそれぞれの社会の進行の深度や方向の差を微妙に表している。豊かさに向かって疾走する若者(中国ドラマ「奮闘」、韓国ドラマ「ヒーロー」)、ス1号店と、シェアハウスに住みながらも、心を開くことなく、内なる世界に閉じ込める、日本の痛い男女の物語(「ラストフレンズ」)は、あの時点で3国の立ち位置を象徴していたといえよう。豊かさの量の拡大を目指す2国と、あえて拡大を自省しようと試みる日本。

さて、7年後の3国ドラマはどう変わったのか。

中国ドラマは「武神趙子龍」。韓国は、クネ大統領が大好きだという三国史時代の伝説的英雄を描いた(何でもアリの)大スペクタクル時代劇ドラマ。韓国は「ヨンパリ」。高い報酬なら、無法なヤクザの願いも叶えてやる、凄腕で怪しい外科医の、これも何でもアリの)大スペクタクルアクションメロドラマ。一方、日本のドラマは「おやじの背中」。上映された作品は女子ボクシングでオリンピックを目指す娘と父、ほぼ2人だけの地味なドラマ「ウェディング・マッチ」、視聴者一般の期待を裏切る結末に、中国、韓国から異論も出た。

多チャンネル多番組状況の中、大きな資本を投下し、海外販路の拡大を目指す中国、視聴者の嗜好に最大限従い、韓流ドラマブームの海外輸出拡大を目指す韓国、過酷な視聴率競争をしながらも、一方において多彩なドラマ枠を確保し、作家性を生かすことの可能な日本と、3国の作品は、7年前の差異をさらに拡大してみせたように見える。この間、中国のテレビ界の水平分業化がアジア全体を巻き込むテレビの制作資金獲得競争激化を促し、その流れに翻弄される中国韓国テレビ界と、垂直構造が温存され、安定的制作状況が確保できている日本のテレビ界との環境差は、ここ7年で、更に拡大したといえよう。

そう考えると、韓国が開催資金難からBCMの支援を受けようと、テーマを「アジアフォーラム」としたというのは極めて一面的皮相的見方で、コンテンツ市場を主宰するBCMの参入は、韓国にとっては必然の流れであったのかもしれない。フォーラムの2日目、今回BCM執行委員長として参加した具宗祥(グ・ジョンサン)氏は3国の幹事たちを昼食に招き、BCMとの友好的関係を今後とも継続させ、フォーラムの中で共同制作について議論していくことを提案した。中国は、その場で賛意を表明したが、最終的には、来春改めて協議することとした。日本としては、慎重に考えなければならぬ問題である。

日本の制作環境がそのまま続くかどうか、中国韓国のそれも、どう変わるかは予測不

能だ。ただ、アジアのコンテンツ市場の存在は、日本における制作の有り様と無関係ではなく、また日本のテレビ界の温室的鎖国状況も、TPPによって危機にさらされる日本農業と同じ運命にさらされたいとは言い切れないだろう。今後フォーラムにおいて、共同制作や、コンテンツ市場を正面切って議論する必要はないが、視聴し議論する個々の番組の背後にあつて、3国の立ち位置を正直に表現しているコンテンツ市場にもう少し注目してもいいと、改めて感じた次第である。

しかし、3国の関係は難しい。フォーラムに引き続き行われた日韓中首脳会談において見られた、韓国中国のスクラムから疎外される日本に倣うわけではないが、今回のフォーラムでも、テレビ制作における資金獲得の困難さに直面して、スクラムを組む中韓と日本には若干の距離があると感じた。それは、今後のフォーラムに向けての方向性の認識においても然りである。

最後に幹事として。

いづれにしろ、釜山フォーラムは平穩裏に終了した。昨年の記憶がまだ鮮明に残る私はこの結果にホッと胸をなでおろした。ただ一点、幹事の一人として、心重くしかかることがある。2年後の日本開催についてである。

今回のフォーラムにおける韓国のホスピタリティーは、BCMの資金援助により格段によく、部屋割りの苦労はなかったの

かと思わせたホテルの豪華さには、むしろ困惑した。来年は、中国湖南省長沙での開催だ。中国屈指のお金持ちテレビ局、湖南テレビお膝元での開催は、それだけでなく公式行事には豊富な資金が提供される中国大会だけに、華美に過ぎないかと、むしろ不安である。ご承知のように、日本開催はこれまで資金調達に苦労し続け、事務方の最大の苦痛の種になっていた。3国のテレビの同質性、異質性を見極め、違いは違いとして認め合い、相互理解と共存の道を探るのが、このフォーラムの本趣である。そのためには正確な通訳とわかりやすい字幕が不可欠だ。それこそが最上な「もてなし」であると、日本はこれまでも心がけてきた。金に囚われ規模拡大に走ることなく、実質的果実を得る為の適正規模の、合理的な大会運営に徹したフォーラムに向けて、3国の共通理解が得られないようであれば、2年後の日本開催は難しいこととなるだろう。早速議論を始めなければならない。ぜひ、会員みなさんの協力をお願いします。

それにしても33人の参加者の皆さんお疲れ様でした。伊藤バーには、連日にわたり多数の老若男女が集い、口角泡を飛ばし日本の放送界を愛い、放送人としての役割や制作者としての自覚について論じ合ったようです。しかも、今回バーの訪問者に若い人が目立っていました。うれしい限りです。今後も、このフォーラムの意義を理解する会員が増えることを期待します。

釜山大会アルバム



ビーチで。砂は貝の微粒でさらさら



ビーチのそばの公園の屋台。



会場の前の海雲台ビーチ。この一帯は高級ビーチリゾート地



会場の海雲台ホテル



アン・ジュシク韓国PD連合会長



グ・ジョンサンBCM執行委員長

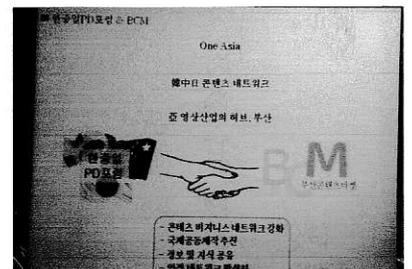


ソ・ビョンソン釜山市長

開会式



韓国伝統楽器の合奏。カヤグム、コムンゴ(琴)、ピリ、テピョン(管楽器)、チャング(打楽器)でKポップ、Jポップを高度の技量で演奏した。



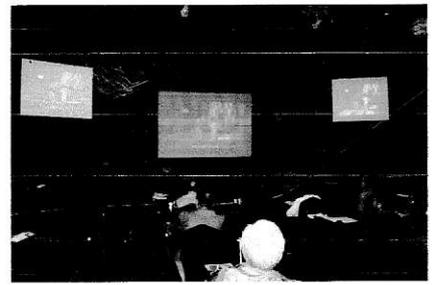
ステージに投射されたポスター。「韓中日PD連合」とBCMが握手し「One Asia」へ、とある。



「しくじり先生」 富沢有人氏



「音楽の巨匠の授業」 姚小莹氏



セッション会場



焦波氏



キム・ヒョンジュン氏



田村文孝氏



司会・イ・ドンギョ氏



「武蔵野子龍」 程力棟氏



「青春FC11」 チェ・ジェヒョン氏



セッションの司会・ソン・イルジュン氏



釜山市観光・後ろに光るのは広安大橋



KPDA-ピッチング



「デロンレポート」 牧之瀬恵子氏



「田舎…」のカメラマン



「田舎から見た中国」 焦波氏



「町の晚餐」 イ・ジウン氏



「おやじの背中」 八木康夫氏



「ヨンパリ」 オ・ジンソク氏



「見えず聞こえずとも」 伊集院要氏



4日目・閉会式



出席作家のトロフィー贈呈



公開トークショー
第13回 人気番組メモリー

NHKのど自慢

「NHKのど自慢」は、戦後まもない1946年1月19日ラジオの「のど自慢素人音楽会」として始まり、今年70歳を迎えた屈指の長寿番組であり、「街頭録音」と並び、一般国民がマイクの前に立ち、自分の考えを述べ、パフォーマンスする、戦前では考えられなかった、「国民による国民のための放送の典型」とも言える番組であった。現在の「のど自慢」は全国各地からの生放送番組。担当するのは、地方局の若手PDで、通常何人かの東京本局の「のど自慢」番組班の応援を得て制作する。今回の実施日の11月7日(土)は長野県塩尻市からの放送前日、予選の日にあたる。東京直轄局での実施には、もともと少人数の東京本局のスタッフ全員が応援に当たらなければならない。結果、今回は制作現場の現役担当者が不在という非常事態となった。ということで、この日の登壇者はミスターのど自慢の金子辰雄さん(1970年から16年8か月間司会を担当し、今の番組の原型を作り、人気を不動のものとした、高円暴夫さん(1993年から12年間担当、ファミリアーナな雰囲気の舞台作りで、番組を刷新した)の両アナウンサーに加え、番組制作者として、のど自慢制作歴の長いNHK制作局・センター長荒木利幸さん。司会は「のど自慢班」の女性プロデューサーの予定だ

つたが、前述の理由で参加できず、仕方なく、NHK在任中に何度か番組に関わったことのある私、邊辺が担当するはめに。そしてゲストは、17歳の「のど自慢チャンピオン」、現在、私たちの演歌歌手として売り出し中の徳永ゆうきさんという、A5人の座組みとなった。

11月7日土曜日、横浜情文センター、「人気番組メモリー・NHKのど自慢」は番組テーマに乗って登壇する登壇者たちを、観客200人の皆さんが手拍子で迎えるという和やかな雰囲気が始まった。

トークの前半は、会場で配られた「のど自慢歴史年表」や、いくつかの資料映像によつて、番組としての「のど自慢」の発展変遷を、戦後の歴史や、放送の発展に沿って辿ってもらおうという趣向である。

番組スタート当時のモノクロフィルム映像に、会場の皆さんは目を輝かせ、歌いだしたばかりの出演者に、鐘1つを意味する「もう結構です」と告げる係官の映像に笑いが起こる。ラジオ時代に既に入局してい

た金子さんの説明は「結構ですは、よかつた結構でしたとの意味にとられ、言われても退場しない人が出たので、鐘による判定となった」とのこと、会場も納得である。

「のど自慢」のラジオ時代の黄金期を担った宮田輝アナの名口調が紹介されたあと、金子アナの最も古い「のど自慢」映像(1973年)が紹介され、当たり前だが、今と違ったふさふさとした髪のスマートな金子さんの映像に会場がどよめく。宮田アナが「ふるさとの歌祭り」に移り、「のど自慢」

の人氣が低迷した後を引き継いだ金子さんのプレッシャーは極めて大きかったよう、出場者が思いっきり歌えるように、上手い司会者ではなく、A隣のおじさんとして、歌を忘れたら、一緒に歌ってあげられるような存在になりたいと決心し、毎日、必死になつて歌詞を覚えたという。毎日、家で紙を見てはふつぶつとつぶやく金子さんを見て、奥さんが「NHKで、また試験があるのですか」と聞いたという話を明かした。

ニユース番組担当だった宮川さんの場合、のど自慢担当を命ぜられ、最初は戸惑

つたが、上司からAのど自慢は人間ドキュメントだと言われ、引き受ける気になつたという。海外開催11回のうち9回を担当した宮川さん、最初のブラジル大会で、のど自慢の開催を待ち続けた日系ブラジル人の祖国の歌に対する思いに感激したこと、その熱い思いは、冷房のきかない会場の熱気とともにいやが上にも盛り上がった、17年前の映像を見て振り返った。

その後会場では歌手徳永ゆうきさんの、のど自慢出場から歌手誕生を決めたチャンピオン大会までの映像が流れ、歌好き一家の歌好き少年が周囲の応援を得て、のど自慢に挑戦する姿が紹介された。徳永さんの親しみやすい姿を通じ、「のど自慢」は、こうした歌好き人間によつて支えられていると、会場の多くの人は改めて実感したようである。ちなみに大会出場に応募する人たちは、1大会平均1000名(組)だそうである。

数字の話が出たところで、「のど自慢」の全貌を分かっていたかどうかという趣向で行われた、クイズ「数字が語るのど自慢の



徳永ゆうき氏



金子辰雄氏



宮川泰夫氏



荒木利幸氏

トリビア」に、会場は大いに盛り上がった。以下、

その数字だけ挙げてみる。

●3345 (約3300)

「のど自慢」 これまでの放送回数

●7900

「のど自慢」 これまでの出場応募者(組)数

●739250 (約740000)

「のど自慢」 これまでの出場者(組)数

●350000

金子さんが、これまで「のど自慢」であった人数

●3と11

合格Ⅱ鐘3つ、その音階(ドシラン・ドシラン・ドミレ) 11

後半は、「のど自慢」2日間(土曜日予選、日曜日本番)から見える人間ドラマというテーマで話が進んだ。

要約すると以下のよう内容だ。

その1「のど自慢」その内容は土曜日夜まで、誰もわからない。

その2「のど自慢」出場の決め手は、歌唱力より人間力

その3「のど自慢」その構成はドキュメンタリーの構成と同じ

全くお互いを知らない人達250人(組)が一箇所に集まり、予選は始まる。そして本選出場者20人(組)が決まり、日曜日の本番までの濃密な2日間が始まる。司会者

とスタッフは、出演者に聞き取り(取材)を行い、出場者の歌にまつわる人間ドラマを見つめる。そしてそれらを参考に、番組構成登場順とインタビュー内容や合格予測)を行う。一方出場が決まった人たちは、楽団とのキー合わせを行い、身内知人たちに出場決定を知らせ、あすの番組録画を依頼し、興奮と緊張の一夜を迎える事になる。

それらが終わるのは、たいてい深夜、翌日曜日本番の集合は朝7時半、集合した出場者の眼は一樣に赤かったとは、金子さんの証言だ。スタッフの眼も当然赤かったはずとは、私の経験からの断言。深夜までの仕事を終えたスタッフ達も、あすの本番に向けて、興奮と高揚感を静めるのに酒の効用を借りていたからだ。

本番当日の日曜日。ここまで積み上げられてきた準備によつて、滅多なことで番組に失敗は起こらないという。生放送の現在、出場者や、ゲスト歌手の出場が不能となったケースや、番組中断などあったかを聞いたが、それはないらしい。ただ、録画時代に、電源事故のため、録画が中断したことが2度あったという。

宮川さん担当の時は、中断したところから再開、金子さんの時代は、初めからやり直したという。合格者から賞品のタオルを返してもらい、やり直しが同じ結果となることを必死に祈ったという金子さんの失敗談に会場に笑いが起こる。再開かやり直しかは、録画用テープが高価で貴重であった時代だったか否かで決まったのではと、司

会者の知ったかぶり発言。本当かどうかわからない。

本番が終わったあと、出場者はなかなか解散しないという。誰がいつともなく「同窓会」をやらうと言う声が出て、今でも定期的集まっている例が多いとは、金子さん。

35万人と出会ってきた金子さんは、そうした人々と交流を続け、何組かの番組を通じて結ばれた人たちの仲人も勤めてきたそうである。そうしたカップルから誕生したお子さんか描いた金子さん自身の似顔絵を会場に持参した金子さんから、いかに「のど自慢」を大切にしてきたかが伺えた。

一方徳永ゆうきさんの例ばかりでなく、ある日突然、一期一会の縁で繋がった20人その一人として、人前で思いっきりパフォーマンズできたという自信が、いかにその後の人生を左右したか、出場者個人のその後の人生にも関心がある。かつて井筒和幸監督の「のど自慢」なる映画があったが、その続編で描いて欲しい、とは終演後聞いたある観客の話だ。

「のど自慢」の面白さと魅力とは、結局うたわれる歌や熱唱する出場者に視聴者が自分の人生や生き方を重ね合わせて見ることが出来るものだからであろう。

最後に、70年も続く「のど自慢」とはどんな番組かを聞いた。荒木さんは、出場者をどうして決めるかを例に引き、歌が上手いから決めるのではない。出場者が、歌にどう思うかを込めているか、歌と歌う

人の間にどんなドラマがあるかがポイント。単なる歌番組ではなく、やはり「人間ドキュメント」と言い、宮川さんは、そうした人間のドラマが詰まった45分の「人生劇場」だとも。また金子さんは、番組のほとんどが全国各地から放送されることから、「ふるさと応援番組」という。

司会者からは、「のど自慢」は全国のNHKで仕事をする人間のほとんどが、何らかの形で、何らかの機会に(制作、技術、事業、営業、管理職)一回は接することがある番組である。視聴者とともに歩むことを標榜するNHKとしては、最もNHKらしい番組として大切にしなければならぬ番組だと、蛇足発言。

番組冒頭で唱えられる明るく、楽しく、元氣良く」このキャッチフレーズは、70年前の番組スタート時に存在したわけではないが、ある意味で、焼け跡で打ちひしがれた国民の、明るい未来を信じ、自立しようとする、あの当時の新しい時代への意気込みを表しているまいか。いつの時代であつても、新しい時代への意気込みは必要であり、「明るく、楽しく、元氣良く」は、今も時代的意味を失っていないとの発言も。

「のど自慢」、番組の最後は恒例のゲスト歌手の歌、本日のゲスト、徳永ゆうきさんが持ち歌を披露、大拍手の中で「私も、のど自慢のゲスト歌手として出演したいです」と宣言、さらに応援の拍手が重なるなか、番組終了テーマとともに開きとなった。

た。

た。

(記・渡辺純史)

ラジオのページ

松尾羊一氏と石井彰氏による

トークイベント「ラジオの戦後70年」誌上再録

「放送人の会」ラジオプロジェクト名誉顧問の松尾羊一氏と放送作家の石井彰氏による「ラジオの戦後70年」と題するトークイベントが10月3日(土)四谷の某会議室で行われました。

この企画はメディア総合研究所が主催する「メディアの戦後70年」シリーズの第4回として開催されたもので、ラジオ関係者やメディア研究者が集まりました。会には、只今より重大なる放送があります。皆様、起立願います・・・。」で始まる「玉音放送」のノーカット版を聴くところからスタートしました。

石井 玉音放送は「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び」の部分だけが有名ですが、全文を聴くと侵略戦争は私の志とは異なる」とか「原爆投下の惨害は計り知れない」とか新しい発見がありますネ。松尾さんは玉音放送を聞いたのはお幾つとき? 何処ですか?

松尾 私は15歳の時だった。神田錦町の学校で先生たちに交じって聞いていた。でも内容は理解出来なかった。放送を聞いた後は先生に連れられて神田から皇居まで1キロほど歩いて行って十下座した。しかし涙を流すとかいった深い感慨は無く虚脱状

態だった。皇居の周辺で何人かの自決していた兵隊も見た。その後9月2日の降伏調印までの数日間は東京の上空はグラマン等の米軍機が乱舞し、官庁街方面からは煙が立ち上っていた。後から思うと戦時中の証拠文書を一齐に燃やしていたのだと思う。

石井 私の母に聞いたんですが、故郷の諏訪では玉音放送はほとんどの人が理解できなかった、だから負けたとは思わなかったそうですね。後に和田信賢アナによる解説番組まであったそうですが、終戦直後のラジオの印象はどうでした?

松尾 NHKしか無い時代で、ラジオは茶ダンスの上にあった。あまり聞かなかったが印象に残っているのは「尋ね人の時間」や「配給ニュース」。銀座の資生堂前から「街頭録音」という番組が「あなたはどのように食べていますか」というテーマで人々にマイクを向けていた。築地の自宅からかけたので覚えてる。その後しばらくしてからは「日曜娯楽版」のど自慢素人演芸会「話し泉」「二十の扉」やドラマの「君の名は」や「向こう二軒両隣り」などを聞いていた。

石井 その後1951〜2年頃に民放ラジオが開局しますが、文化放送に入る動機は?

松尾 私が入社する1年前の1952年に文化が開局した。就職難の時代だったが、文化放送で落語を聞いていたら「只今職員を募集しています」と放送があった。落語が好きだったからその手の番組担当になれ

るかど期待して受けてみようと思った。上智大学が試験場で800人ほどが受けた。入社してから驚いたのは社員には元NHK、元通信社、元撮影所音響技師、等中途採用者が多かったことだ。希望配属先を「演芸番組の制作班」としたが無視されて「放送指揮室」に配属された。当時はアメリカから録音機器が大量に入ってきて民放番組のほとんどが録音番組で、15分や30分の番組を放送順にセットして送出する部署だった。同じ部署に吉永小百合の旦那になった岡田太郎もいたが、その後何人かが文化とLFからフジテレビに移籍した。

石井 松尾さんはフジへの移籍は希望しなかったんですか?

松尾 あの頃はラジオ全盛の時代で、テレビは「電気紙芝居」と言われていて全く興味はなかった。

石井 「放送指揮室」の後は「報道部」の社会教養班に行かれたんですね。ここに松尾さんが以前に書いた本「ラジオグラフィティ」放送局の24時間の中に社会教養班では録音構成番組「日本の子供」シリーズで「ある捜索願」とか「ズリ山に育つ子供たち」といった番組で民放祭賞を受賞したと書かれています。

松尾 当時はSONYがデンスケという携帯録音機を開発して取材がしやすくなっていった。また週刊文春や週刊新潮等の出版社系の週刊誌が登場して、データマンとアンカーマンの合作によるルポ記事が目玉された。あの方式がラジオの録音構成番組の制

作手法の参考になった。取材してきた音がデータマンでそれを繋ぐアナウンス原稿がアンカーマンと考えればいろいろな番組が出来ると考えた。それをNHKでやっていったのは吉田直哉さんたちだった。当時の社教班では硬派の「マイクの広場」が中心で民放祭で多くの賞を獲得していたが、私はTBBSの朝の帯番組で白木屋提供の「ラジオスケッチ」のタッチが聞きやすくて刺激を受けた。社会風俗の変化とか具体的なテーマを追いかけて、街のおばさん達の話さをさりげなく録音して構成する方がラジオ的だと思った。私が担当した「日本の子供」シリーズはTBBSの「伸びゆく子どもたち」と競い合っていた。

石井 ラジオの黄金時代だったようですね。TBBSの宇宙飛行士になった秋山さんがやはり録音構成番組を担当したと言っていました。構成作家はどんな人が居たんですか?

松尾 須藤出穂など東大の演劇研究会や美学を卒業した連中を構成作家として起用した。またNHKをレッドパーズされた高瀬広居、児童文学者の筒井敏介、若手では、岩間芳樹とか川崎洋、寺山修司なんかも使った。「日本の子供」は子供たちの視点で世の中を見る番組で、日教組の教研集会などに取材にいつて無着成泰や阿部進などに取材した。

石井 1960年当時の新聞でラジオ欄を見るとラジオドラマが各局とも非常に多かった。朝から夜まで30分の連続ドラマや15分の帯とかドラマが全盛だった。それ

を松尾さんはどう見てたんですか？

松尾 あの頃は文学座とか俳優座等の劇団は本公演だけでは食っていけない時代で、放送局を専門に廻るマネージャーが居て、いつも売り込みに廻っていた。ドラマ専門のディレクターが何人もいたし、効果音の専門家も局内にて制作環境が整っていた。同時にリスナーからもイメージが膨らむラジオドラマの要望が非常に強くあった。

石井 今はラジオドラマのレギュラー枠はNHKにあるのとLFが32年ぶりに復活させた「夜のドラマハウス」くらいになっちゃいました。

そんな時代から東京オリンピックを挟んでテレビが普及してテレビの時代が来しました。そこでラジオ各局がその対抗策として取り入れたのがアメリカのラジオ編成手法

「生・ワイド・パーソナリティ」です。その頃松尾さんはどう考えていたんですか？

松尾 あの頃「ラジオオルネッサンス」というキャッチフレーズでLFやTBSが早々と導入した生ワイド方式は我々が作ってきた番組手法と全く違っていた。あそこでラジオ編成が完全に転機を迎え、それまでの作品主義の制作者は完全に社内失業者になった。アナウンサーの時代からパーソナリティの時代になって親しみやすいラジオの時代になっていった。俺の仕事は終わったと思う。

その頃、放送局の人間はオールラウンドプレイヤー、営業も編成も出来る人間が求められたが、器用に立ち回れなかったし、そ

の風潮には馴染めなかった。

石井 その頃、土居まさるが深夜の時間帯で「やあやあ元気かい？オレ土居まさる」のしゃべりで人気者になって、それがきっかけで深夜放送が始まった。

松尾 それまでのアナウンス言葉は「みなさん今晩は」だったが、土居まさるは直接リスナー個人に語りかけるようにしゃべったところが画期的で人気が出た原因だと思つて「あの喋りは許せない」と問題になった。しかし彼はそれに抗してその喋りを変えなかった。その結果ますます人気が高まっていつてパーソナリティの時代が幕を開けた。その功績はある。その後、アナウンス部からみのもんたや落合恵子、吉田照美等が輩出した。

石井 1967年にTBS「バックインミニージャック」、LFの「オールナイト」がスタートし、一足遅れて1969年QRの「セイヤング」もスタート。やがて深夜放送ブームの時代になっていった。その頃に松尾さんは3時間20分のパロディー番組「昭和元禄忠臣蔵」という特番をプロデュースしていますね。みのもんたが狂言回しで「只今中山安兵衛氏が高田馬場に到着しました。仇討でお忙しい最中ですが強引にインタビューしてみます・・・」という台詞など、僕が二十歳の時に聴いたのを鮮明に覚えています。

松尾 もしも文化放送が忠臣蔵の元禄時代にタイムスリップして存在したらという趣

向で、討ち入りの12月14日に放送するという企画を編成部長に話したら面白がってくれて実現した。

当時生ワイド全盛の時代に突入して、どの局を回しても同じスタイルの番組ばかりで面白くない。そんなラジオ界に喝をいれようという動きが出てきて「昭和元禄忠臣蔵」もそんな発想を先取りした。後にLFのリアルタイム長時間ドラマ「宇宙戦艦ヤマト」やTBSのネット系列を動員してのドキュメンタリー枠などが話題になった。

石井 文化放送には鎌田啓子さんなど全員女性のディレクターたちによって制作する「落合恵子のちよつと待つてマンデー」がスタートして、女性の視点から社会の出来事を見る番組とか、私も構成で参加した「梶原しげるの本気でDONDON」のようにその日のニュースの真相を生ワイド番組で徹底的に追いかけるスタイルとかジャーナリズム性に富んだ番組が多かったですね。

松尾 「本気でDONDON」は私も参画していましたが、今TBSが荻上チキでやっている「Session・22」のスタイルを先取りしていたと思います。もうその頃になると電話回線の音が良くなっていてスタジオから電話をかけて取材することが可能になった。デンスケ取材に頼らなくなつた。つまり以前の録音構成の形式を生放送でやれるようになった。

石井 オウム真理教問題などかなりきわどい事件も扱っていた。ところで民放祭とかの番組コンクールの審査をやってみるとロ

ーカル局の録音構成などに優れた作品がけっこう多い。ジャーナリズム精神が地方のラジオ局に生きてると感じます。

松尾 それは同感。ローカルのほうがはるかに面白い番組がある。地方局には番組作りのいい意味での徒弟制度が生きていて先輩の指導で作っている局が民放コンクールや芸術祭を目指している。

変わりゆく農村、山村の姿をじっくり時間をかけて追っている局とか骨太の作品が多い。「ラジオドキュメンタリーはローカル局」という傾向は今でも続いていて、キー局がほとんど放棄した録音構成番組をしつかり作り続けている。

石井 ところで現在Radio Kopレミアムがスタートして何処に居てもリアルタイムで全国のラジオが聴けるようになってきます。またFM補完放送がスタートすることになってAMラジオがFMでも聞くことが出来るようになる。但し90KHz以上の周波数帯が聞けるラジオ受信機は普及していないという問題がある。こういうラジオにとつて大きな変化の時代を迎えています。最後になります。松尾さんはラジオはこの時代にどう対処したら良いと思いますか？

松尾 FM補完放送なんて言わずにFM放送になればいいんですよ。昔ラジオに燃えた今の団塊世代を再びラジオに呼び戻すことは可能だし、すでに彼らは懐かしい電波共同体に戻りつつある。又、スマホにイヤホンをつけて音楽を聴いている若者をRa

diko 経由でラジオに引き込む環境は出
来ている。永六輔さんの口癖だけれども「僕
はラジオという村に暮らしている実感があ
る。テレビが都会ならラジオは間違いなく
村であり、横丁だ」出入り自由なラジオの
里山の性格を見抜いている言葉だと思っ
た。メディアの限界集落に陥る前にラジオとい
う里山に暮らしている人たちが考えてネッ
トを通じて発信していく「地産地消」のラ
ジオ。若いラジオマンたちが新しいラジオ
を創ろうという気運を高めていけば未来は
開けると思う。(報正 田中 秋太)

ドキュメンタリー・ドラマ『ポップ
コリン・オン・ザ・ギンザ』を制
作して

延江 浩

「言葉」というものは、その時代に生きた
人々の息づかいまで聞こえてきてどきどき
する。微かな音の断片に耳を澄ませば、見
えなかったものまで鮮やかに蘇る。

「メリーランド大学で検閲資料が公開され
た、それがほんとに貴重です」

東大教授のロバート・キャンベルさんが
そう教えてくれたのは、彼がその取材とワ
ークショップで渡米する直前だった。

川端康成・太宰治・林芙美子らの、検閲
前のオリジナル作品である。

1945年から7年間、日本は連合国占
領下にあり、多くの分野で「検閲」がなされ
たが、文学では資料が日本に残っており、
作家自身も口外しなかったため、あく

まで推測に過ぎなかったものが明らかにな
ったという。

マッカーサーの検閲官が検閲資料を密か
に持ち帰り、メリーランド大学に寄贈して
いたため、70年を経て「存在しないはずの」
文献が発見された。私たちが読んできた戦
後文学も、実はオリジナルではなく、GHQ
の検閲によって削除されたものを読ん
だということになる。

ロバート・キャンベルさんほど日本文学
を愛している人はいない。番組では彼が日
本で初めてそのオリジナル部分を紹介し、
重田裕一 東大教授と検閲内容と意図を探
り、占領期日本の「光」と「闇」を見つめ
た。番組タイトルは、占領期日本を活写し
た紀行文『ポップコリン・オン・ザ・ギン
ザ』からとった。アメリカ赤十字社の任務
で日本に滞在した女性、Joy Godwin (ル
ーシー・クロケット) による日本未翻訳の
著作である。

当時、GHQが置かれた第一生命ビルか
らほど近い銀座は道路標識も英語に書き換
えられ、アメリカ軍将校夫人たちがカラフ
ルに車体をペイントしたジープを運転し、
カーラジオからはジャズが流れていた。

戦後70年を迎えた夏、ロバート・キャン
ベルさんが、当時のたまたまのままで保存
されているマッカーサー執務室、アメリカ
歩兵部隊がパレードした中央通り、日本人
立入禁止占領軍専用のPXとなった『和光』
を巡っていると、一匹の黒猫が彼の前に現
れ、彼を70年前の銀座へと誘う。そこには

当時の銀座を歩く谷崎潤一郎、太宰治、坂
口安吾がいた……。

GHQの検閲は巧妙だった。戦前の軍部
による検閲では伏せ字や×印でその検閲
箇所が明確だったが、GHQは活字になる
以前の検閲で、いわばまっさらな状態で街
に出された。そこが「巧妙」といえる(十
重田教授)。

「特攻」や「占領」を想起させる記述は根
こそぎ引つかかった。写真家の木村伊兵衛
にしてもそうだ。終戦直後初めての国政選
挙。銀座4丁目選挙ポスターに見入る庶
民の写真にMPはいない。交差点には彼ら
が交通整理をし、和光にしても占領軍専用
のPXだったのに、その写真は一枚もない。

戦後日本で「特攻」は軍国主義の悪夢の
ように報じられたが、「存在しなかったこ
とになっている」。川端の作品では日本人の
精神的気高さと誇りとも受け取る精神構造
が伺えた。

表現が限定される作家の悔しさは想像す
るに余りある。その悔恨をラジオドラマと
した。太宰を長塚圭史さん、坂口安吾を中
村まことさん、林芙美子を町田まりーさん、
木村伊兵衛を玉置玲央さんが、ロバート・
キャンベルさんを当時の銀座裏通りへ誘い
出す黒猫を白石加代子さんが演じ、検閲に
対する悲しみと反逆、そして、これからの
希望を見事に表現してくださった。

終戦直後、みんなが活字に飢えていた。
現在とは比べものにならないほど。だから
こそGHQはそこに目をつけたのだが、日

本の作家も出版人も巧みだった。最初こそ
事前検閲がなされたが、年月を経るにつれ、
必要なくなる。それは、GHQへの「付度」
であった。この文化は今の日本でも変わっ
ていない。

そして、もう一つ、日本語の「曖昧さ」
があげられる。

「(日本語の) 曖昧さは、宝だ。そこに奥
行きがある」とは戦後生まれで初めての京
大総長になった山極寿一さんだが、文学は
その特殊性で日本の戦後の変遷を連綿と繋
いできた。

番組内で、木村伊兵衛はこう言っている。
「俺の写真にアメリカ人が写ってないっ
て？ふざけるな。敢えて写してないんじや
ないか。だからこそ、そこにアメリカがい
るんだ！ いいか、覚えておけ。見え見え
もんが、いちばん真実なんだ！」

(FM東京 制作プロモーター)

追悼

加藤節男君を悼む

武本 宏一

おいおい飾つちゃんいや、加藤節男君
ひどいじゃないか、そんなに早く逝ってし
まうなんて。

つい50年前、君はぼくより4年遅れて、
TBSラジオ制作部の歌謡曲班に入ったっ
けな。静かな微笑を絶やさぬ好青年だった。
しかし君にはいつも一本、太い芯が入っ

ていた。我々先輩ディレクターたちが、やれ美空ひばりだ、やれ三波春夫だ、と大物演歌歌手と十年一日の如きクロウト芸能番組を作っている間に、君はあの頃突如スタジオに現れ始めたジープンでギター片手の青年や、長い真つすくな髪をゆらせる女性フォーク歌手たちに、音楽新時代をいち早く嗅ぎつけていたんだね。

つまり、シロウト時代の到来だ。

ちょうどあの頃、ぼくが命名者として参加した「バック・イン・ミュージック」でも、その道のプロが登場して専門の話をする他曜日よりも、とにかく若い視聴者の投書をひたすら読み上げ、一緒に笑ったり泣いたりする。「ナッチャン・チャコちゃん」コンビが、一番人気を博したものであった。

ラジオの送り手も受け手も共にフツツの人になって、ラジオは生まれ変わったとも言える。

君の告別式で弔辞を読んだのは、あのフォーククルセダーズの一員で、今は九州大学の名誉教授をつとめる北山修さんだった。「加藤さんは、私を、バック・イン・ミュージック」にレギュラー出演者として呼んで下さり、とにかく自分の言葉で、自分の考えを自由にしゃべって下さい、と言われました。当時フォーク界も、硬派とエンタメ派とが対立し、自分も迷っていたのですが、加藤さんに音楽を深く愛しつづつ、社会についても深く考えて行きますように、と励まされ、自分の道が見えた気がしました。あれはぼくの原点でした。」

その後加藤君は、文化放送の人たちと共に、明治神宮球場で「深夜放送祭」を開いたりして、フォークやニューミュージックの世界では今に至るも多くの人たちに慕われている。

告別式場の献花者札にも、吉田拓郎、松任谷由美ら錚々たる名前が並んでいた。

節男君。君はそうした人たちと二人三脚で新しいラジオの世界を創り上げてくれたのだ。

どこの業界でも、時代の変化に気付かず、手をこまねいて衰退を招くことが多い。

君は一年程前に放送人の会のメンバーになってくれて、ここでも新風を吹き込んでくれるものと、期待していたのに……。口惜しい。

それにしても、文化の日に亡くなるのは、なんとも君らしいな、と思う。

「馬骨会」拾遺

〜野崎茂さんを偲ぶ〜

松尾幸一

暮れも押しつまる頃合い、われわれは民放連の事務方や伊豫田康弘を世話人に、日経の松田浩、産経をやめてフリーになった青木貞伸、同じく平凡社から社会評論を目指す鈴木均や伊藤洋子（宣伝会議）に文化（放送）と調査情報で赤坂通いの「足人種（わたし）」などの常連が加わり（ほぼ15人程度）飲み会を開く。

恒例の親睦旅をどこの馬の骨ともわからぬからと野崎茂は自らも含めて「馬骨会」と名付けた。また無名だった若者たちが集まり、中伊豆は温泉宿「湯川屋」で飲み且つ談話風発が毎年のしきたりだった。

「ここは学生時代に合唱部を引き連れてよく来たもの」と肝いりの野崎茂は「三枝博音、吉野秀雄先生らの定宿で」と遠くを見つめるように呟いた。

教師はその哲学者と歌人のほかに林達夫、服部之綏、片岡良一、高見順、中村光夫などそうそうたる文化人が教壇に立つ鎌倉材木座は古刹光明寺の庫裏が教室。層敷きの塾を「鎌倉大学校」と自称したが文部省認可とはならず、とりあえずは「鎌倉アカデミア」と銘づいた「母校」を「当世書生氣質」風に描写した山口瞳「小説 吉野先生」に詳しい。いずみたくや前田武彦を世に送り、ジャーナリストが多いから、昭和40年代に「鎌倉アカデミア」は注目を浴びた時期があった。

山門に筆でギリシヤ語を「幾何学を学ばざる者、この門に入るべからず」（ピタゴラス）と記したのが学長の三枝博音だった。のちに横須賀線鶴見大事故（昭38年）の犠牲となった。

学部の配置は産業科、文学科、演劇科、映画科などで、文化国家を標榜する戦後の時代にはこの教師人脈は魅力だった。

古都鎌倉は教育・文化都市がふさわしい。古くから文化人が愛し、松竹大船は先進娯楽のメッカだ。鎌倉財界人の尽力でも前後

の運営難を乗り切れず4年足らずで廃校になった「大学」が昭和21年に発足した。

産業科に籍を置いた野崎も「幾何学」を総合教養と捉えて吉野先生に私淑した、と言う。

囲炉裏端を囲み、酔うほどに突然立ち上がり、得意のステッカーマシンなどロシア民謡やドイツ語でシューベルトの歌曲を歌う、いや吠える、見事なテノールで、野崎は部活の合唱部リーダーだった。

さて夏になれば「馬骨会」は毎年飛騨高山を経て、実家がある永田俊和（LF）運転の車で徹夜踊りの郡上八幡へ。ぐるりと回って手拍子の春駒、かわさき……。酒豪の伊豫田康弘は踊りじゃない、千鳥足だ。

それらが20年以上も続いた。やがて野崎の喜寿の会が北鎌倉で。突然野崎は引退宣言以後は同席の大山勝美と「放送人の会」設立に邁進すると。野崎の「幾何学」とはオール放送人が参加するアーカイブ運動を意味していた。代表に牛山純一を擬したが急逝した。そこで川口幹夫を標的にしてNHKを総覧する一大組織の土台を築く。一方放送批評懇談会では研究者や放送周辺領域の業界運営中心のテキスト・ワークの編成に熱心だった。いわば「放送幾何学」の構想である。

その彼がなぜ、なぜ？突如伊豆山に引込んでしまう。己の内面の幾何学構築の余生実践に備えたのだろうか。

昭和3年生まれの人87歳がまた独り、静かに退場してしまつた。（敬称略）

でもいる。ステーション広報誌の孤塁を誇り高く堅守するTBS『調査情報』の連載企画の集約だが、こうして一本化されてみると、改めて市川哲夫編集長以下スタッフの歴史眼の確かさと編集センスに敬服を禁じ得ない。

巻頭は70年の大阪万博とテレビマンユニオン創立の奇縁に触れた今野勉氏から、時代のキーワードを『モウレッツからビューティフルへ』と見立てた藤岡和賀夫氏（広告プロデューサー）へと続くが、この中身と文章の流れが心地よく、興の極くまま59項、500ページ近い大冊を一気に通読してしまふ。話題は社会・文化・風俗などに偏ることなく、例えば、田中首相を退陣に追い込んだ「田中金脈研究」は立花隆氏、「ロッキード社贈収賄事件」は堀田力氏、「リクルート疑獄事件」は宗像紀夫氏など、政治・経済の大事業もニュースの立役者自ら執筆して深層を明かしている。

読後、感慨もこもる高揚感の中で、「まあ試しに読んで「らんないよ」と誰彼なく同輩に薦めたくなるが、殊に現役「放送人」たちには再発奮の願つてもない指南役になるのではないか。

テレビ関係の執筆者が四分の一を超えるが、ちなみに、当会会員からは今野勉会長の他、澤田隆治氏が「MANZAI」ブームのいきさつを、前川英樹氏が地デジ化後のテレビの戦後・後時代の始まりを論じて、生彩を放っている。（鈴木典之・記）

変わる中国変わるメディア

渡辺浩平著



CMとバラエティー抜きにテレビは語れない。では中国のCMとバラエティーについて私たちはどれほど知っているのか？

著者の渡辺浩平氏は放送人の会会員で北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授。その前は広告代理店の社員として、猛烈な大量消費の時代を迎えた中国の北京、上海に勤務した。彼が上海で合弁設立手続きが遅々として進まないとき、江南春は大学3年生で広生会社を設立、そこから5億ドルを超える売り上げのビジネスが生まれる。「小資」と呼ばれる中間層をターゲットに湖南衛星テレビの大量視聴者参加番組「超級女声」が生まれ、社会現象といわれるブームになり、当局がそれを放送禁止にするなど、メディア統制、国家戦略の多くのエピソードが描かれている。2008年刊で少し古いですが、日韓中フォーラムがビジネスの場になるいま、中国のマーケットについてこれくらいは読んでおきたい。続編にあたる内容は「越境するメディアと東アジア」（玄武昌編・勉誠出版）にある。（講談社現代新書・720円）

新人会員紹介

中町綾子（なかもちあやこ）71年8月生。日本大学芸術学部教授。著書「ニッポンのドラマ21の名セリフ」「なぜ取り調べにはカツ丼が出るのか？」。テレビドラマ批評連載「テレビの泉」「TVレビュー」「あのドラマこのセリフ」「アンテナ」「週間テレビ評」など。

塚原あゆ子（つかはらあゆこ）テレビドラマ・ディレクター。㈱ドリマックス、テレビジョン。担当作品「名もなき毒」「今夜も心だけ抱いて」「アリスの棘」「Nのために」「セカンドラブ」「マザーゲーム」「理由」「スナーク狩り」「レベル7」など多数。第1回大山勝美賞受賞。

柏木登（かしわぎのぼる）53年4月生。77年NTV入社。「木曜スペシャル」「11PM」「TIME 21」「スーパーテレビ情報最前線」などを担当。「鉄腕DASH」「行列ができる法律相談所」CP。人事部長、情報センター長、事業局長を経て08年中京テレビ放送取締役。13年パップ代表取締役。15年BS日本常勤監査役。

延江浩（のぶえひろし）58年3月生。エフエム東京。担当番組「これからを見つめて」LOVE&HOPE」「ピート・シーガー追悼特番・野に咲く花は少女の胸に」、ドラマ「ミイラになるまで」、ドキュメンタリー「ザ・ライン」僕たちの境界線」、「ラブ&ホープ」ヒューマンケアプロジェクト。小説「アタシ」はジューズ」で小説現代新

人賞。

増山麗央（ますやまれお）72年4月生。97年FM東京入社。「これからを見つめて」LOVEHOPE3年の春便り」でギャラクシー賞、日本放送文化大賞、受賞。

塚本幹夫（つかもとみさお）58年7月生。81年フジテレビ入社。報道、デジタル・コンテンツ、クリエイティブ事業、IT戦略などを経て現在企画室主席渉外役。

鈴木弘貴（すずきひろたか）十文字学園女子大学メディアコミュニケーション学科教授。著書「越境するメディア」東アジア」「テレビニュースの解剖学」「現代ジャーナリズムを学ぶ人のために」「EUを考える」（いずれも共著）

矢口久雄（やぐちひさお）50年3月生。㈱テレパック取締役チーフプロデューサー。ドラマ制作。担当番組「週末婚」「昔の男」「温泉へ行こうシリーズ」「同窓生、人は三度恋をする」

深尾隆一（ふかおりのりいち）9年9月生。72年TBS入社。バラエティー、ドラマ制作、編成、ライツ部門、労務、総務を経て㈱東通社長。担当番組「8時だよ！全員集合」「飛べ！孫悟空」など

藍澤幸久（あいざわゆきひさ）49年9月生。㈱イーストで約10年、フリーで演出約4年、現在㈱キメラ社長。

岡本勉（おかもとつとむ）54年1月生。78年読売新聞入社。経済部、ニューヨーク特派員を経てメディア局でインターネットとテレビを担当。現在テレビ新潟監査役。

会員名簿

2015.11.20 現在

【あ】 藍澤幸久 相本芳彦 青木裕子 秋田完 秋田和典 秋山豊寛 雨宮望 新井和子 【い】 池田正之 石井彰 石井ふく子 石橋映里 石橋健司 石橋冠 磯智明 磯野恭子 磯村健二 市岡康子 市川哲夫 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬 弥永子 【う】 上田洋一 上村忠 浮田周男 碓井広義 臼杵敬子 内山洋道 宇野昭 【え】 江川雄一 江口展之 榎本恒幸 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】 大池雅光 大蔵雄之助 太多亮 太田昌宏 大西康司 大野秀樹 大原れいこ 岡弘道吉 緒方陽一 岡野真紀子 岡本勉 小川治 小河原正巳 沖野暁 荻野慶人 尾田晶子 織田晃之祐 【か】 加賀美幸子 各務孝 柏木登 片岡敬司 勝部領樹 葛城哲郎 加藤滋紀 加藤拓 加藤義人 金澤宏次 金沢敏子 金子登起世 金平茂紀 加納孝夫 川平朝清 鎌内啓子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 河邑厚徳 河村正一 【き】 北川泰三 北川信 北川祐美香 北出晃 北林由孝 北村美憲 北村充史 木村成忠 【く】 工藤英博 久保志穂 隈部紀生 倉内均 倉澤治雄 訓覇圭 黒崎博 黒沢淳 【こ】 小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 後藤和晃 小山帥人 近藤一男 近藤邦勝 近藤晋 今野勉 【さ】 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江 桜井均 佐々木彰 佐々木欽三 佐々木光政 笹山正勝 佐藤敦 佐野有利 澤田隆治 沢田隆三 【し】 重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 志津木敬 四宮康雅 柴田陽一郎 嶋田親一 清水満 志村一隆 下崎寛 下重暁子 白井博 【す】 菅野高至 菅野嘉則 杉田成道 鈴木昭典 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木弘貴 鈴木道明 鈴木嘉一 須磨章 【せ】 関佳史 せんぼんよしこ 【そ】 曾根英二 【た】 高島秀之 高田宏 高橋練 鷹森泉 竹中一夫 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則広 田原茂行 玉城朋彦 【ち】 崔銀姫 【つ】 塚原あゆ子 塚本茂 塚本幹夫 辻本昌平 土屋敏男 つボイノリオ 露木茂 鶴橋康夫 【て】 寺島高幸 【と】 東城祐司 堂本暁子 戸田桂太 外崎宏司 豊原隆太郎 【な】 中尾幸男 中込卓也 中崎清栄 中島僚 中田美知子 永田浩三 永田俊和 長沼士朗 永野敏一 中町綾子 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村英美子 中山和記 並木章 【に】 新村もとを 西憲彦 西村与志木 西川章 仁田豊文 仁藤雅夫 二宮文彦 丹羽美之 【の】 信井文夫 延江浩 【は】 橋本潔 林健嗣 林安二 原由美子 原田令嗣 【ひ】 玄武岩 【ふ】 深尾隆一 藤井チズ子 藤久ミネ 藤村忠寿 【へ】 逸見京子 【ほ】 星田良子 星野輝一 堀川とんこう 【ま】 前川英樹 牧之瀬恵子 増山麗央 松尾羊一 松平定知 松前洋一 黛りんたろう 【み】 三上義智 水上毅 水野憲一 南譲 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川鏡一 三宅恭次 【む】 村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】 本木敦子 諸橋毅一 門奈昌彦 【や】 八木康夫 矢口久雄 矢島良彰 藪内広之 山鹿達也 山泉昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】 横山英治 吉澤保 吉田賢策 吉永春子 吉村豪介 吉村直樹 【わ】 若松央樹 和崎信哉 渡辺浩平 渡辺敏史 【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟

編集後記 ▼日韓中フォーラム釜山大会に編集部からの参加は伊藤、前川の二人。辻本カメラマンの参加もなく、頼りなかったのですが、多数の参加者の方から原稿を寄せていただき、こらんのような大会報ができました。ご協力ありがとうございました。釜山での伊藤バーの経営はカンパと持ち込みのおかげで黒字です。利益は来年に回します。▼「いろはに時代劇」は今回休載です。菅野さんの言い訳は「釜山で気の重いことをして、軽いものが書けなかった」とのこと。で、「ハプチョンに祈る」を読むと納得できます。▼10月12日、朴槿恵大統領はそれまで検定制度だった歴史教科書を国定にするに決定しました。実施は来年度からですが、フォーラムではホットニュースでした。父親の朴正熙も1974年教科書国定化を行い、今回の国定化は父親朴正熙が民主主義を弾圧した独裁者ではなく、経済発展の立役者だと書く教科書を使わせるためだと悪評で、特にメディア関係者から強い反発があります。「しくじり先生」の「教科書」に韓国側から何とも言えない面白い反応があったのはそのせいでしょうか？(視郎) ▼私はテレビっ子で、ラジオは深夜放送を少し聞かかじったぐらいの世代です。そんな私にとって、今回のラジオのページはとても興味深い内容でした。名優たちが次々と亡くなられ、俳優陣の力量不足が指摘される今のテレビドラマ界。殊に映像以上に演技力を求められるラジオドラマに新しい可能性と必要性を感じました。(京子)

12・6シンポジウムに 参加してください

戦争を考えるシンポジウム『戦後70年テレビは何を伝えたか』が、放送人の会と明治大学「社会思想史研究会」との共催で開催します。

日時 12月6日(日) 14時～18時

場所 明治大学和泉校舎・図書館ホール
(京王線・井の頭線「明大前」駅下車
徒歩5分・正門入って右側)

司会 明治大・生方卓先生

登壇 東大大学院・高橋哲哉先生と
放送人の会から今野勉 藤久ミネ
金平茂紀、桜井均の各氏

「安保関連法」の強行採決から2か月が経ちました。一方、日中韓のあいだの「歴史認識」問題も調整のヤマ場を迎えて、「戦後70年」のエポックは、戦争を知る世代には傍観できない様相です。

シンポでは戦争関連のテレビドキュメンタリーの問題作を時系列的に紹介、番組映像と共に解説した後、被害と加害の問題など多角的に論議し、戦争の本質を考えます。

折角の機会です。会員の皆さんの積極的な参加で盛り上げてくださるようお願いいたします。(実行担当)